
GAの世界へようこそ！

冬泉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

GAの世界へようこそ！

【Nコード】

N7934E

【作者名】

冬泉

【あらすじ】

GREYHAWK | ANOTHERとは、異世界エルスに於けるエーリック大陸、その東部であるフラネース地方にて幾多の冒険者が体験した物語の基礎となる設定の解説です。GREYHAWK | ANOTHERの他の物語を読む際の参考にどうぞ。

GA-00 「ご挨拶」

御挨拶

皆さま、GREYHAWK ANOTHER (GA)の世界へようこそ。この世界で紡がれる物語は、旧TSRと言う米国のゲーム会社が創った『WORLD OF GREYHAWK』（灰色の鷹）の世界に於いて、RPG (Role Playing Game) をベースにしたNRPS (Net Role Play Situations、ネットにてプレイするロールプレイゲーム) のプレイ記録を小説化したものです。この複雑なGAの世界を紐解く為、以降に種々解説を載せていきたいと思います

主要世界の地図

下記のサイトに『THE WORLD OF GREYHAWK』のオリジナル地図が掲載されております。GREYHAWK ANOTHERの世界も、地図はこれに準拠しております。

<http://www.nirgal.com/games/rpg/greyhawk/bigmap>

GA - 01 「歴史と年号」

歴史と年号

GAの世界は、全てコモン歴（COMMON YEARS、『CY』と略します）を基準としております。このコモン歴は、エリック大陸で当時最大最強であつた『GREAT KINGDOM』（上王国）の最初の上王（Over King）の即位年をコモン歴元年とする年号で、今ではエリック大陸の東部諸国で広く使われております。

GAは、実地で十一年に渡って実地プレイされた二つの年代をベースにしています。

第一紀	『封印戦争』時代	コモン歴585年～
第二紀	『暗黒戦争』時代	コモン歴764年～

間が二百年弱開いている第一紀と第二紀では、当然の事ながら登場人物が異なります。また、同じ時代で進められている物語自体も年代的に数ヶ月～数年の時間差があります。

それ故に、物語をお読みになる場合、まずは現時点で一番年代が古い『魔性の瞳』からお読みになることをお勧めします。この物語に出てくる『魔剣士エリアド』と『夢見姫レムリア』を軸に、第一紀の他の物語をお読みになれば、このGAの世界がより理解し易いでしょう。

コモン歴の他には、古代スール帝国で使用されていたスール歴、^{バクラニ}漠羅爾旧王朝で使用されていた^{バクラニ}漠羅爾歴、フラン歴などがあります。

現在では、イースタンではもっぱらコモン歴が使用されていますが、ウエスタンではまだ**漠羅爾歴**^{バクラーニ}が使われています。

GA - 02 「世界と名称」

世界と名称

GAは、『エルス』(OERTH)という惑星の、『エーリック』(OERIK)という大陸をベースにした物語です。エーリック大陸は、^{バクラニ}漠羅爾新王朝六カ国のある“西側部分”をウエスタン、コーランド王朝、ヴェロンディ連合王国、グレイト・キングダム(上王国)などがある“東側部分”をイースタンと呼称します。

エルスには二つの月、即ち近い方の月『ルナ』(LUNA)と遠い方の月『セレネ』(CELENE)があります。ルナはエルスを二十八日周期で、セレネは九十一日周期で周回しております。ひとはルナが満ち欠ける二十八日、或いは七日間からなる四週間で構成され、セレネが満月になる三ヶ月毎に一週間の『祭り』(FESTIVAL)となります。即ち、一年間は十二ヶ月+四週間(祭り×四回)の合計十三ヶ月となります。尚、各月にはエルス独特の名称が付けられています。

1 月	FIRESEEK (火起)
2 月	READYING (準備)
3 月	COLDEVEN (平温)
春の祭り	GROWFEST
4 月	PLANTING (種蒔)
5 月	FLOCKTIME (芽吹)
6 月	WEALSUN (陽光)
夏の祭り	RICHFEST
7 月	REAPING (刈取)
8 月	GOODMONTH (良好)

9 月	H A R V E S T E R (収穫)
秋の祭り	B R E W F E S T
1 0 月	P A T C H W A L L (修繕)
1 1 月	R E A D Y ' S R E A T (木枯)
1 2 月	S U N S E B B (日没)
冬の祭り	N E E D F E S T

また、一週間には下記の名称が付けられています。『神の日』には、自分が信仰してる神の神殿に行つて祈りか労働奉仕を行い、『休の日』には自由に休息を取る、という日常になっております。

星の日	S T A R D A Y
日の日	S U N D A Y
月の日	M O O N D A Y
神の日	G O D S D A Y
水の日	W A T E R D A Y
地の日	E A R T H D A Y
休の日	F R E E D A Y

GA-03 「基礎設定」

基礎設定（キャンペーンワールド、GREYHAWKについて）

グレイホーク

GREYHAWKとは、旧TSR社が最初に出した公式キャンペーンワールド設定である『THE WORLD OF GREYHAWK FANTASY SETTINGS』を意味します。これは、GREYHAWKと言う世界の解説した“基礎資料集”です。

GREYHAWKの公式世界には、後年幾つかの追加資料（FROM THE ASHES、GREYHAWK WARS、GREYHAWK ADVENTURES、各モジュール類）が加わりました。しかしながら、このGREYHAWK ANOTHER（GA）の世界は、最初の設定資料集に基づいて世界構築を行っており、後年に発売された追加資料集は一部しか反映させておりません。これには理由があります。

私がベースとしているGAの世界は、基本的に所属していたゲイム・サークルで1987年から1997年まで実地プレイされた“歴史”にかなりの部分を負っています。そこでプレイされたGREYHAWKは、最初の資料集の最終年月を出発点としてキャンペーンを実施しており、その資料集に不足する部分をDungeon Master達が付け足す形でその歴史を続伸させてきました。この結果、後年に追加資料が発表されても、既に独自の歴史が誕生している関係で、新規資料の導入が簡単にはいきませんでした。

このGAの世界も幾つかの独自解釈と独自設定を生かす為に公式設定を一部スキップしています。特に、歴史関係はコモン歴579年以降、かなりの部分が独自のものとなっています。更には、私が

ゲーム・サークルを離れた1997年以降は、別の手段にてプレイするRPG（NRP S）をスタートしたことにより、1997年次点で時間停止していた歴史を再度活性化し、これまで通常のシナリオではフォロワーし切れていなかった部分にスポットを当てました。それにより、各PC、NPCの人物像、歴史的背景などが一層深耕していきました。この時点で、GAはゲーム・サークルでの実地プレイ時代のGREYHAWKを離れ、独自の道を歩き出していると形容しても良いかと思います。

現在のGAは、神古から現代（最も新しい時代はコモン歴800年代）までの歴史をGAのものとして再構築すると共に、私なりにGREYHAWKの曙から日没まで、一つの世界の物語として表現できればと考えています。

GA - 04 「神古の時代」

神古の時代

「神古の時代」とは、GAでは『創世の時代』に当たります。あの時から、惑星『エルス』（OERTHと書きます）に“創世神”（BUILDER、ビルダー）と呼ばれ、本当の意味での“神”の域にある超存在が現れ、この世の全ての理の礎を創造しました。これら“創世神”は、後世の“神”（所謂GOD、時間の枠組みから外れた存在だが、必ずしも万能ではない）と呼ばれる存在と明確に区別されます。

“創世神”と呼ばれるその超存在達は八柱（光・闇・地・水・火・風・時・命の八柱）が存在し、それぞれが司る領域にその創造力を注ぎました。こうして、惑星『エリス』上での基盤が形成されました。各種族も誕生して、徐々にその数を増やしていきました。

この“創造の瞬間”から暫し年月が過ぎ、世界全体が安定して各種族が発展の軌道に乗った後、ある時期を境に、“創世神”達のプレゼンスはエルスから急速に希薄になっていきました。これまでは神殿に行けば誰にでも“創造神”の声が聞けたところが、神官からの“語り掛け”でなければ、応答が来ることが希になったのです。

世界に住まう各種族は、こうして徐々に“創造神”に依存する生活様式から、自分たちで考えて解決する生活様式に変わっていききました。それに伴い、これまで特に差がなかった各種族間の暮らしにも変化が生じ、各種族別に分かれて生活する傾向が強まっていきました。

GA - 05 「上古の時代」

上古の時代

GAに於けるエルスの歴史では、神古の時代に続く時代を『上古の時代』と称しています。この時代は、凡そBC15000～BC5000（BEFORE COMMON YEARの略）の間続き、“創世神”（Builder）のエリスに対するプレゼンズが徐々に薄れていった期間でもあります。“創世神”たちからの示唆が減少していったこの時代の人々は、神を忘れない為に持てる全てを注ぎ込み、神々に最も近い都 後世ではWest Heaven（西方楽土）と呼称される壮麗な大都市『上都』を、“創世神”たちが最初にその足跡を記したと言われる地に建立しました。全ての種族が集まると、一人の神官王、四人の大祭司と十二人の大賢者を選びだしました。聡明で思慮深い彼らが治めるこの煌びやかな都は繁栄を謳歌し、永遠にこの時代が続くかと思われていました。

何時の頃からか、人々に一つの“声”が聞こえてくる様になりました。その声は、“創世神”達のプレゼンズの減少に伴い、徐々にその存在感を増していきました。“時の声”と称されるようになっていったそのメッセージは、上都の人々の間に根付くと共に、単一の言葉を話す全ての人々の間にゆつくりと広まっていきました。それと同時に、人々の考え方、暮らし方は変化を遂げていきました。質素から華美へ。謙虚から顕示へ。献身から支配へ。公平から搾取へ。誠実から利己へ。人々の間の感じ方、考え方、生き方に生まれた差は、坂を転げ落ちる玉の様に互いの亀裂を拡大していきました。

これ以降の部分で、後世に伝わっているのは、巨大な天変地異と共に上都が地の底深く沈んだこと、その時の大変動で時空が歪み、

互いの言葉が違ってしまったこと　そして、その全ての背後に、
“暗黒神”サリズダンの影が見え隠れしていることです。上都の滅
亡と共に上古の時代は終わりを告げ、神聖スール帝国と漠羅爾古王^{バクラニー}
朝が力と魔導で互いに覇を唱えた中古の時代が幕を開けるのです。

GA-06 「中古の時代」

中古の時代

West Heaven（西方楽土）が崩壊した後、エルス正しくはエーリック大陸上の民族の流れは、東方を目指しました。大災厄に見舞われ、大地と時間すら捻れた彼の地を背後に封印し、山脈を越え、ステップを渡り、肥沃であろうと噂される大陸東部に向かったのです。そして、最初の大きな民族の流れが、周囲を高い山脈で囲まれた広大な土地に根を下ろし、そこに国家を建設しました。これが、神聖スール帝国（Holy Suel Empire）

この時代の片方の雄の起源です。迫り来る災厄から漸く逃れたとはいえ、その悲惨な記憶はその後も長く国民の心に影を落とし、漸くこの影響が薄れてきたのは第三代神聖皇帝の御代になってからのことでした。

BC5000からの一千年間は、神聖スール帝国は特に相対する相手もなく、平和に国造りに邁進しました。West Heavenを模した巨大な都、聖都が国の中央に建設されたのもこの時代です。神聖帝国の威光は国の隅々まで届き、国民は繁栄を謳歌していました。

その繁栄に、かげりが出来てきたのはBC3500頃からです。北の山脈（スールハート山脈）の向こう側のステップ地帯に遊牧民が集まり、徐々にその中で力を持った族長が氏族を纏め始めたのです。最初、繁栄の絶頂にあった神聖帝国は、これらの動きに見向きもしませんでした。己が力の慢心の始まりでしょうか、“この国に敵う者無し。この国の民は特別”という選民思想の兆候が、徐々に国の指導層と民の間に顕れるようになってきました。

BC3000、北のステップ地帯で初めての王国が誕生しました。一人の若い族長が遊牧民の氏族ほぼ全てをまとめ上げたのです。その若者の名は龍王・漠羅爾^{リュオン・バクラニバクラニ}、漠羅爾古王朝の始祖でした。彼は、ドラミディ大洋沿岸に都『大都』（今の恵久美流公国首都の場所）を創ると、瞬く間に国の体制を整えていきました。そして、龍王・漠羅爾が没する迄に、神聖スール帝国の北には強力な新国家が誕生していたのです。

GA - 07 「新古の時代」

新古の時代

神聖スール帝国と漠羅爾旧王朝^{バクラニ} 二つの全く文化が異なる巨大な勢力がぶつかるのは時間の問題でした。それでも、初期の頃は互いに商業的な交流は維持されていました。神聖スール帝国から漠羅爾旧王朝へ、両勢力を分けるスルハート山脈を越えて、幾つもの隊商が神聖帝国の帝都と、王朝首府を往復していました。しかしながら、既にこの頃から文化・習慣の違いから、小さなすれ違いは生じていました。それらは、全体の大きな流れの中では問題にならないレベルでした。あの惨劇が起こるまでは。

BC (Before Common Year の略) 100年。
一つの漠羅爾隊商が、スルハート山脈を南北に抜ける峠道を北上しておりました。神聖スール帝国で荷を降ろし、代わりに漠羅爾旧王朝では好まれる嗜好品を満載した隊商の足取りは遅く、非常にゆっくりの移動速度でした。丁度神聖スール帝国の勢力圏を抜け、漠羅爾旧王朝の版図に入ろうとする頃に惨劇が起きました。巨大な龍に跨った黒衣の戦士が三騎、隊商を襲ったのです。短い、血生臭い戦闘の後、隊商は壊滅。動く者が居なくなつたのを見とり、黒衣の戦士三騎はその惨劇の場所を去りました。

しかし、全滅したと思われていた隊商には、一人だけ生き残りがいたのです。最初の龍の火炎放流で吹き飛ばされて意識を失つたのが幸いし、惨劇を生き延びました。呆然として倒れた仲間の間を彷徨う内に、その者は煌めく剣の破片を見つけました。柄だけとなつたその剣には、くつきりと神聖スール帝国親衛騎士団の紋章が刻まれていました。

「続く」

GA - 08 「新年スペシャル」

この世の彼方の館

その館は、何処かの深い森の奥にひっそりとあった。そこに至る者は、この世の理と、多かれ少なかれ、その命運を結び合わせた者達だった。

大きな広間の奥に切つてある暖炉からは、パチパチと薪がはぜている。その広間には、中央に大きな円卓が一つだけ置かれており、その周囲には色々な様相の者が座っていた。甲冑を身に纏った者がいれば、優雅な夜会服を身に纏った貴婦人がいる。こんなところにあると思う様な子供の姿もあった。

やがて、紅い胸甲を身に纏った女性騎士立ち上がった。はっとする様な整った顔立ちには、鋼の様な瞳が輝いている。

「方々。」

杯を高く掲げると、その女性騎士は厳かに言った。

「一つの年が終わり、そしてあらたな年の幕が開く。来るその年に於いて、私たちが何が待ち受けるかはわからぬが 勇気を、そして希望を失わぬ事だ。己が意思の力を信じれば、如何なる路も必ずや開けると私は思う」

一座を見回すと、己に集中する意志と想いの力を感じる。

「それでは。私たちそれぞれの未来に、乾杯っ！」

カシャン、カシャンとグラスやマグが打ち合わされ、そして陽気な宴が始まった。^{うたげ}

「見事なご挨拶です」

「皮肉か？」

「いいえ。本当に、そう感じましたの」

「・・・まあいい」

細いグラスを傾けると、琥珀の液体を優雅に飲む。

「ところで 姫は古き年と来る年をどう思われている？」

「はい、古き年の間は、なかなかわたくしの話も進展を見せませんでした。来る年には、少しはお話の進展を期待しておりますわ」

「そうか だが、姫。貴女の状況はまだ良い方だ。私など、異空異時間にローラン殿と飛ばされたまま、進展無しだ」

「まあ・・・」

「少しは、その停滞空間を動かしてくれることを期待しているのだがな」

「強く願えば、きっと叶いますわ」

「そうだな。そうするでしょう」

「ところで、カーシャさま」

「ん？」

「どなたか、意中の方がおりました？」

「ぐっ・・・レムリア姫、いきなり何を言っただ？」

「いえ。ずっと独り身を通してきたカーシャさまですもの。よほど良い方がいらっしゃるからでしょう？」

「い、いや。その様な相手はおらぬ」

「そうなのですか？」

「うむ……。そう言うそなたはどうなのか？」

「今のお話のわたくしは、まだ己の意思が未分化で、わたくし自身もやきもきしていますわ」

「そうなのか？」

「はい」

につこり笑顔を浮かべる夢見の姫に、ちょっと額に汗を浮かべる紅の龍騎士だった。

「オレらが揃うのも久しぶりだな」

「揃うと言っても、ランバルト。白の聖者様、灰の予言者様はいらっしゃっていないよ」

「我ら四名のみ」

「そうは言ってもね、ディンジル、ヒラリー。わたしたちが逢うこと自体、久しぶりでしょう？ わたしは、それだけでもとっても嬉しいのだけど？」

「ダリエンの言う通りさ。三人欠けてるけど、再会に乾杯しようぜ」
「ふむ……。まあ、良いだろう」

四人はそれぞれのグラスを掲げると宙でチンと合わせた。

「ところで、ディンジル」

「なにかな？」

「愛しのヒラリーちゃんとのラヴラヴの日々は……。へぶうー!!」

ヒラリーの繊手が紅の勇者の脇腹にめり込んでいた。

「おほほほ。雉も鳴かずに打たれませんか」

「冷たいんですね、ダリエン？」

「あら？ 自業自得でしょう、これは？」

「・・・そう言うことにしておきましょうか」

「ライライ、オレの愛しの姫君と、何をくっちゃべってるんだ？」

「ああん？」

いつの間にか復活してきた紅の勇者様。その隣には、涼しい顔でグラスを傾ける紫の騎士もいる。

「誤解 という言葉は理解されないのでしょうかね」

「あたぼうよ！ オレのインテが幾つだと思ってるんだ？」

「恐竜並みだな」

「そうですよ。恐れも痛みも感じませんから、重宝するのですけれど」

おほほほ、と紫の騎士様に笑いかける蒼の賢者様。

「ところで、ヒラリー」

「何か？」

「あなた方は、今後どうするの？」

「使命はまだ終わっていない。使命を全うするまで、プライムに残り続けるだろう」

「辛くない？」

「・・・正直に言えば、辛いと感じる時もある。だが・・・もはや一人ではないからな。その辛さも耐えることが出来る」

ダリエンは、黙ってヒラリーを抱きしめた。ダリエンの温もりが、ヒラリーの心を温めた。

「あれ？ おい、ヒラリー。お前趣旨替えしたのか？ いつからレ・・・」

「衝破光っ！！」

目映い光の帯が辺りを真っ白に染めると、その不埒な発言をした馬鹿者を彼方に吹き飛ばした。

たま屋あ・・・、というのが、その馬鹿者の恋人が漏らしたコメントだったという。

「このメンツが揃うのも久しぶりね」

「上の方々と同じ事を仰っておりますね、マールさん」

「いいのよ、ウイン！ 何たってアタシの廻りに世界が回ってるんだから！」

「わあ、す、凄いねマーちゃん！」

トクイ、トクイとその薄い胸を張るのは黒髪が長い少女。その隣で両手を握ってキラキラと瞳を輝かせる小柄な少女の傍らでは、ほんわかした雰囲気の栗色の髪の少女が笑顔を浮かべている。言わずと知れた、我らがソーサリアン三人娘である。

「アタシたちメインの話って、完全に停滞しているわね。ホント、失礼しちゃうわ」

「でも、少しずつお話は進んでいますわ」

「年に二回のペースでしょ！ 冗談じゃないわよっ！」

フンガーっと鼻息も荒いマール。あらあれ〜と笑うウインディ。おろおろとするシャイン。三者三様だ。

「まあ、一番重要なアタシたちよ。史的にも、語的にも、欠かせないでしょ？」

「そうだよな！　ボクたち、ソーサリアンだし！」

「グレイホーク・アナザーの世界は、時が一筋の流れとなってる所。神古の時代から始まって、現在、そして未来へ。どの時代に生まれても、どの時代に生きていても　忘れられることはありません」

「で、でも！」

「なによ、シャイン！」

「創造主さん・・・かなり忘れちゃってるみたいだよ・・・」

「え~~~~~っ!!」

悲痛な、だが何処かコミカルに聞こえるマールの悲鳴。おろおろするシャイン。にこにこ笑うウィンディ。そして、ダ・カーポ（笑）。

「すっかり脇役、ですね」

その温厚そうな外見の青年は嘆息して言った。

「嘆くな。我らが主たる話は、彼の第二紀大団円を持って終わりを告げたであろう？」

「そうは言ってもですね、ルーン・・・」

青年が話しかけた相手は、見事なプラチナブロンドを肩口で切りそろえた女性だった。その隣には、長い黒髪を三つ編みに結んで肩から前に垂らした女性が微笑んでいる。二人とも、一度見たら忘れられない様な強い印象を与える素晴らしい美人だった。

「・・・脇役？」

続きの言葉を言おうとして、先に入った突っ込みにつくりとなる青年。だが、気を取り直して、傍らに座る小さな女の子の頭を優しく撫でる。

「違うよ、ノア。正確に言うのだね、“休眠状態”っていうんだ。決して“引退”したわけじゃあないよ」

「そうなんだ」

「そうとも」

そのつばらで純粋な瞳を見ながら、青年は力強く頷いた。

「ギャラハッド。いい加減なことをノアに吹き込むなよ」

「いい加減とは失敬ですね、ルーン。ほら、カーラも笑ってないで、少しルーンに言っただけだよ」

「何を言えと？」

「だからですね・・・」

「いいのだ、カーラ。コヤツが軟弱にも待つことに耐えられず、己の状態に自信を失いつつあるだけのこと」

同情の余地も無い　と続けられて、ギャラハッドと呼ばれた青年は思わず苦笑いを浮かべた。

「そこまでは言わぬよ。だが、我らが話しもソーサリアンの三人娘の話に準じている。あちらが動かねば、こちらも動かないな」

「然り。カーラの言う通りだ。何も、我らの人格を攻撃しているのではない。単に、更新が非常に遅いだけだ」

「・・・遅いという点ではいつものことですけどね。それくらいは

理解しているつもりですが」

「不満か？」

「少しは」

ルーンに返すと、肩を少し落として戯けてみせる。

「それよりも、貴殿ら、来る年の抱負は何か？」

「そうですね　今度こそ、貴女とのラヴラヴ話を・・・うぐっ！
」

「冗談はよせ」

どこかのだれかと同じく、脇腹に織手を突っ込まれて苦悶の表情のギヤラハッド。

「雉も鳴かずに打たれまいに」

そのセリフまで同じであった。いや、浮かばれないのはどちらも同じか。

「私は、あの三騎龍に一矢報いてやりたいな」

「同感だ、私も」

ルーンとカーラはお互いに冷え冷えする笑みを浮かべて言う。

「あの後ろで笑っているパボニスとアスクレウスとやら。教訓を垂れてやらぬといけない。あのままでは、曲がった大人になるからな」

すでに育ちきっているのではないかというギヤラハッドの突っ込みはきっぱり無視された。というわけで、哀れな青年は隣の少女にその対象を変える。

「ノアはどうしたいのかな？」

「・・・そうね・・・。世界の平和、かな・・・？」

「世界平和：それはまたグローバルでジェネラルなことで・・・」

何処かかみ合わないまま、それぞれの想いを抱いて、四人の夜は過ぎてゆく・・・。

「姫様、こちらをどうぞ」

「ありがとう、パリス」

ジョフ大公国の誇る飛翔騎士の一人、トニオ・パリスが細いグラスをジョフの至宝、大公女レアランに渡した。

「二人とも、レコンキスタでは力を貸してくれてありがとう。心から感謝致します」

「勿体なきお言葉」

恭しく頭を垂れるのは、マリー・ケイセル。もう一人の飛翔騎士である。この二人、対照的な人物である。トニオ・パリスは陽気な小兵で、マリー・ケイセルは大柄で生真面目な女性だ。二人は、レアランを含めて、ただ三騎のジョフ飛翔騎士であった。

「大公女様は、来る年に何を思われますか？」

「ジョフの民が、復興の苦しさに負けずに、再び住みよい、素晴らしい国を作り上げることです」

はつきりと言いきったレアランの瞳には、強い輝きが宿っていた。

「あなたは？」

「わたしですか？　そうですね、今年こそ可愛い彼女を見つけて、田舎に帰って羊の放牧でもしたいですね」

「戯れ言を」

「あ、きっぱり切られた」

にこにこ笑うトニオは、マリーに何を言われても全く気にしていない様子。

「あなたは？　マリー」

「私は、今年同様、来る年も大公女様にならずお仕え出来ればと思います」

「マリーは真面目だね」

「トニオが不真面目なのだ」

「そうですね？」

「そ・う・だ。」

「二人とも・・・」

仲が良いですね、と続けたレアランの言葉に、二人とも目をむいた。だが、優しく笑うレアランに。何時しか二人の表情も和らいでいく。

「今年も、皆で力を併せて、ジョフの復興と民の安寧に頑張りましたよう」

「勿論です」

「全力を挙げます」

チン、と合わせたグラスがその決意を祝福するかの様に鳴った。

荒くれ猛者、とでも言えそうな厳しい面構えの戦士達が四騎。何れも、大戦士グランと共に、苦しいレコンキスタを乗り切った一騎当千の戦士達だ。軽騎一のルー。軽騎四のマイラム。装騎のフレム。親衛騎LAGのアルノ。四人は、手に持った杯を勢いよくガチンと合わせた。

「我々全員の為に乾杯っ！」

「ジョフの未来の為に！」

「大公女殿下と大戦士様の為に！」

「友軍として奮闘してくれたコーランド派遣軍の盟友達の為に！」

思い思いの言葉を叫ぶ。大きな戦役を戦い抜いた漢達おことの表情は非常に明るかった。

「お！ トリアノン殿っ！ こちらに来ませんか！」

目敏く見つけたマイラムが呼びかけると、近衛騎士ギャルトの礼装を纏った女性騎士が歩いてきた。

「これは皆様方。ごきげんよう」

「トリアノン殿、お疲れ様です」

「ご丁寧に、リュティエンス殿」

「先だつての戦役では、トリアノン殿とコーランドの盟友達のご助力、心から感謝申し上げます」

「私たちは出来ることをやりました。それが、貴国のためになったと有れば、それを大変嬉しく思います」

「本当にありがとうございます」

「カリスタン殿、頭を上げて下さいませ」

「いや、フレムやアルノの言う通りだ。トリアノン殿、本当に感謝する」

「へえ〜お姉ちゃんって凄いんだ」

唐突に、脳天気な、緊張感のない、不躰な　まあともかく突っ込みが入って、ジョフの四騎士は一体だれが？って顔を上げた。

「あなたね！　いきなり失礼じゃないの！」

ゴイン、と一発妹の頭を叩くと、肩口で髪を切りそろえた勝ち気そうな娘が頭を下げた。

「すみません、妹が唐突に」

「貴女がたは？」

「ご紹介しますわ、カリスタン殿。妹のオルセーとシュノンソー。二人とも、コーランドの近衛騎士ですわ」

「それも、腕の立つ騎士よ〜って、痛いじゃないの、お姉ちゃん！」

もう一発をオルセーから貰ったシュノンソーが抗議の声を挙げる。

「あんたわね〜（怒）もう黙ってなさい！」

「う〜横暴」（涙）

「ははは・・・元気な妹さん達ですね」

さしものマイラムも目を白黒させている。

「うふふふ、自慢の妹たちですよ」

「そ・う・で・す・か・・・」

引き気味に話すフレム。その時。

「あ、姉さま！ ラーライン様が呼んでらっしゃいます！」

「あらそう？ では、すぐに行かないと。皆さん、失礼致しますね」

「はいはいはい、ごめつくり」

「ばっはは〜い」

「あんたは黙るって言ったでしょ！」

優雅に一礼するトリアノン、シュノンソーを引つ張るオルセー。

騒がしくも目立つ三姉妹が去ると、一騎当千の勇者達は大きく溜息を付いてお互いの顔を見合わせた。そして、“オークレイダーの相手の方がましだな”と言ったと言わなかったとか…。

シェリドマールの真珠。コーランドの賢者。ラフラー宮の白き姫君。夢見の女王。などなど。数多の称号を帯びるこの若い娘こそ、当代きつての名君と言われるコーランドの女王、ラーライン・ド・コーランドであった。

その女王陛下、物憂げにグラスを傾けて、一人でお座りになっている。お付きが全くないのも異例だが、まあここは安全な場所なので大丈夫なのだろう。そういうことにおこうと思う。

「皆さん、楽しまれているようね」

それはそれで良いことだけど、とラーラインは思った。でも、自分分は少し退屈してしまっている。

「王陛下は、年末年始なのに、一人で龍退治に出掛けられたし・・・。こんなに可愛い、美人で賢い奥様を放って於いて、何が楽し

いのでしょうか？」

ほう、と溜息を付く。宇宙一と名乗るだけ合って、ラーラインの夫君であるバド国王は、猪突猛进だった。西に龍がいると聞けば、どこでも乗れる馬に乗って突撃。東に悪漢がはびこっていると聞けば、あつというすつ飛んで行って現下に成敗する。そんなこんなで、家（王宮）を留守にすることが多く、ラーライン女王は寂しさを囲っているという訳なのだ。

「もう・・・浮気、でもしてしまおうかしらん・・・」

物騒な思考をひねくり回す女王陛下。それは、核ボタンでモグラ叩きをするに等しいんですけど。

「構わないわよね？ 向こうも勝手におやりになっているし、わたくしも勝手にさせて頂きましょうか」

思い立つたら吉日。ラーラインは即断即決即行動。とにかくリアクションが早かった。ウィズが高いので単独行動は不味いと思った女王陛下、遠くに見かけたレスコー三姉妹を呼び寄せると、ルンルン気分でパーティー会場を後にした。（って、大丈夫なんですかね、これで？）

「ああ、久し振りだなあ」

「おおげさですわね、兄さま」

「だってな、考えてみるよアリサ。件のキャンペーンが終わってしまってから、一回も出番が無かったんだぞ」
くだん

「大団円の度合いが大きかった対象は、それだけ後での出番が少な

いつてことさ。わかってるんだろ、ユージェーヌ」

「皆まで言つなよな、ギルバルト」

「そうであっても、お二人とも嬉しいのでしょうか？　また出番があつて」

ユージェーヌとギルバルトは、二人してちよつと決まり悪そうに顔を見合わせた。

「さあさあ、今年の豊富は何でしょう、というのがお題だそうよ。兄さま、ギル、どんな抱負なの？」

「そうだな。今年こそ、カーラ殿に想いを伝える努力を多少なりとも進めようと、ちよろつと考えたくあるな、うん」

「複雑な言い方をするなよ。カーラに気があるのは、見え見えだぞ。相手にも、伝わっていると思うがな」

「ホントか！　ホントにそう思うか！」

兄さま、キャラが違つてきてますよ」と、ここで妹が心の中で泣きたのは秘密だ。だいたい、この新年編、キャラが違つてきているのばかりだし（爆）。

「それは兎も角として　おまえ達はどうするんだ？」

「へ？」

「おまえとギルだよ。結婚するんだろ？」

「あ、ああ・・・って、おまえ知ってたのか？」

「周知の事実だ。ラフラー宮（コーランド王宮）全体に知れ渡つてゐるぞ」

「むう・・・」

「早いトコ、オレン所に挑戦に来いよ。オレに勝つたら、妹との結婚を許してやるから」

「嫌がらせしてるだろ」

「他に何があるっていうんだ？」

ここで、妹がはぁ、と心の中で溜息をついたのは秘密だ。いや、ばればれだったかも知れないが。

「ともあれ！ 今年こそはもつと物語に復権しよう！」

「おう！ たまには良いこと言うじゃないか、ユージェーヌ！」

「たまには、は余計だ！」

「たまにも言わんだろう、普通は！」

「言っただなあ！」

「それがどうした！」

対峙する二人。お互いに、コーランドの至宝とか銘が付いている剣に手を掛けてたりする。だが。

「いい加減にしなさ~~~~~いつ!~!!~!!」

あきれ果てた妹の一喝で、そんな行動は粉碎された。

「正月草々、喧嘩なんかしていると、わたしが粉微塵にしてあげますわよ！ ほら、そんなことをやっている内にスペースが尽きたじゃない！ わたし、まだ何も言っていないのに~~~~あ~~~~!!~!!」

チャンチャン。

「こつ言つ所の登場は初めてだね」

「まともに活字化されてから考えると、十数年は経ってるな。その時でも、三人一緒に揃ったと言つ一行しかなかったし」

「良いのではなくって？ それだけ、世には事も無しということでしょうから」

「銀の姫は余裕だな」

「そう見えますか？ 炎の騎士さま」

「見えるよ」

「まあ・・・」

笑いあう二人を見て、中に立つ青年も笑みを浮かべた。

「僕たちの意志が受け継がれて行くならば、それで良いと思うよ。

常に、世はその時に生きる人々が決めるもの。僕たちは見守るだけだから」

「そうですね」

「ああ、そうだな」

穏やかに笑い合う三人は、談笑しながら黄昏れる中、世々を眺め続けた。

「わたしにも、出番が回ってきたのね」

その少女は、ややもすれば寂しげな笑みを浮かべて言った。グレイト・キングダム帝都ラウクセスでも評判の酒場、BLUE RAGON。夜の喧噪に沈むその店の一角に、ちよこんと座った少女クリスは、出されたオレンジ・ドリンクにも手を付けず、じっと黙っていた。

友達がいらない訳ではない。何時も、自分のことを気に掛けてくれるランカー塾の塾生達や、磯が品かを縫って面倒を見てくれるエリ

ザベートやフランシス、リヒター別館に詰める守護の騎士、ルテキア達もいる。

けれども

じわり、と心を浸食する寂しさが減る訳でもなかった。

深い森の奥にあった古い館　そこで、育った記憶　閉じこめられていたその深い闇の中へ、差し込んだ一条の光　すべては、まだ鮮明に覚えていた。

それでも。

一度知ってしまった暖かみは、奈落の底の深さをより一層感じさせるだけに過ぎない。そして、より深い絶望も。

それでも・・・。

この国の民を護る為、自分は強く有らねばならない。自分というカタチが例え崩れてしまっても、それが国民の平和をくにたみもたらすので有れば　それだけでも、嬉しく思わねばならないだろう。

決心したはずだった。

その決意が鈍るなんて

どうしてだろう？　ねえ、どうしてなの？　どうして、どうして、そんなに笑顔で居られるの？　わたしは、どうしたらいいの？

答えの出ない問い。

。。
今宵も、一人の少女を涙に暮れさせて、帝都の夜は更けてゆく・

「酷いものだな」

「なにが、でしょう」

「思わないか？」

「だ・か・ら・なんのことを言ってるの？」

「言わずと知れている」

「まあ」

「だいたいな、貴女は暢気すぎるぞ、フランシス。今後のこの国を背負って立つ人の嘆きを心配せずになにをばやんとしているのだ」

「あらあらゝ。わたしだって考えていますわよ」

「到底信じられないが」

この二人、誠に対照的だった。エリザベート・v・ルックナー。ルックナー伯爵家の令嬢にして、希代の聖騎士でもある。長い金髪に真っ青な瞳。細面の表情は美しくも凛々しく、都の話題の極の一つだった。

そしてもう一人。肩口で切りそろえた艶やかな黒髪。大きく煌めく黒い瞳。陽気な笑みを何時も口元に浮かべるこの貴婦人はリヒター公爵家のお姫様、フランシス・v・リヒターであった。

二人は古くからの友人（エリザベート曰く、忌まわしく腐れ縁）で、一緒に行動することも多かった。そして、今日も今日とて、新年パーティー会場にこうして一緒につるんでいる。

「いつもに増しての落ち込み振りだな」

「相乗効果なのよね〜。一旦落ち込むと、連鎖反応的にどんどん落ち込んでいってしまうのよね〜あの子の場合」

「そうだな。その不憫さが忍びない」

つと目蓋を見事なレースのハンケチで押さえるエリザベート。余談だが、こちら辺が女性らしさを嫌う彼女のささやかなおしゃれなのかも知れない。

「まあ、泣く子は育つって言うから」

「いけないぞ。」

フランスの戯れ言を、きっぱり切り捨てるエリザベート。

「でもね〜あのままって言うのは、ちょっと可哀想かもね〜」

「その通りだ。だが、肝心な莫迦タレが何も行動を起こさない。全く、何を考えて居るんだか・・・」

ぶつぶつ言うエリザベートにフランスがホンワカ笑って言う。

「いいのよ〜。釣った魚にはエサをやらない、でしょうから」

「あほかっ!!」

ちゃんちゃん

「久しぶりよね〜。記録を見ると、ほぼ一年更新がとまってるんだもん」

「怠慢、ね・・・」

「そうよ、ミューズ。言ってやって言ってやって!」
「?」

「純粹無垢なミューズに変な癖をつけるのは頂けないね、アンリエット」

「あのねえ、アンタには言われたくないわ、トリスタンっ!」

「まあ、それは良いとして。ホントに忘れ去られそうだね、ボクらは。と言うか、『GKDの嵐』の世界自体全てが止まってしまってるしね」

「すつごく重要な時代ステップなのにねえ。結構アタシたちって扱いが薄幸よね」

「・・・創造主にも、色々・・・事情が、あるから・・・」

「あら、お優しいことで」

「あの時代と世界全体を纏める構想はあると聞いたけど」

「“予定は未定、決定ではない”を地でいく感じね。空手形っぽい感じがプンプンするわ」

「そう言いなさんな。言うだけ惨めになるよ」

「そうだけど・・・」

「・・・他の、みんな、は?」

「アキ、エリック、グスタフ、ジャンニ、シュヴァルツ、セリル、ドナティーン、真理査さん、V、ローター、リヒトホーヘン... エリザベートさんとフランシスさん、カリストとレキアの四人は来てるわね」

「何時か、また全員が揃う時があるかな」

「揃う時、じゃないの! 揃うのよ、自分たちの意思で!」

「・・・そう、ね・・・信じていれば・・・いつか、また・・・逢える・・・」

「そうだな」

「そうね」

「では、その再会に向けて、乾杯をしておこう」

「良い考えね! それでは!」

「・・・乾杯・・・」

『カチン』と澄んだ音を立てて、三つのグラスが交わった。そして何時の日にか、もっと多くのグラスが交わらんことを・・・。

G A - 0 8 「新年スペシャル」(後書き)

GREYHAWK ANOTHERのキャラクター、揃い踏みです(笑)。三つの時代(第一紀、第二紀、オリジナル)からの登場ですが、既に幾つかのお話で名前が出ているキャラもいます。ご要望があれば、まだ未登場のキャラの話もアップしてみたいと思っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7934e/>

GAの世界へようこそ！

2010年10月10日04時44分発行